

自校史を知るための他大学アーカイブズの活用

―南山大学学外オリエンテーションを例に―

林 順子

はじめに―『七十五年史』経済学部・経済学専攻編集にあたり―

今回『南山大学七十五年史』を編纂するにあたり、筆者が担当した経済学部、社会科学研究科経済学専攻については、計七名のかたにも分担執筆を依頼した。この中には、経済学部を御退職された荒井好和先生、近藤仁先生も含まれている。また、経済学部在任中に大学アーカイブズの設立にも貢献された川崎勝先生にも、オブザーバーとしてご意見をいただいた。現職、御退職の先生がたと、ご多忙の中快くご協力いただき、心より御礼申し上げます。さて、筆者は学部の学生生活の項の執筆を担当することとなったが、本稿ではその過程で判明した上智大学と南山大学の学外オリの関連と相違について、紹介したい。

南山大学全学的学外オリと経済学部学外オリ

経済学部生にとって大きな行事の一つに、入学式の翌日に新入生に対して実施する学外オリエンテーション（通称学外オリ）があるが、これは、一九八二年度に始まり二〇一六年に終わりを迎えた。今回の『七十五年史』でも取り上げるべきこの行事について、執筆分担者の打ち合わせ（コロナ禍の下zoomで開催）の場で近藤先生より、以前、学外オリが二ヶ所に分散して実施された時期があるとのこと教示をいただいた。

学外オリの目的は、新入生にこれから所属する大学、特に学部の特性やカリキュラムの理解を促し、かつ、初対面の教員や同級生との親睦を図り、大学の一員としてのスタートをスムーズに切れるよう導くところにある。同級生との交流という点からすると、新入生を分散させるのは得策ではない。なぜ二ヶ所分散ということになったのか。筆者は、『七十五年史』執筆のために経済学部長室で教授会記録などを繰りながら、学外オリの記事も遡って調査した。さらに南山アーカイブズにも足を運び、評議会記録をはじめ学外オリの名が付されたファイルなども閲覧させてもらった。結果、本大学にて全学的に実施された一九六九―七一年の学外オリにおいては、当時あった四学部が二学部ずつ一日ずらして実施していたこと、行き先も二ヶ所設定して二学部が分かれて行動していたこと、さらに、行き先によっては一学部全員が泊まれる大施設がなく、新入生が複数の旅館に分散して宿泊したときも、確かにあったことがわかった。さらに、全学的学外オリの廃止から十数年を経て経済学部独自の学外オリが開始される経緯もおよそ判明した。詳細は拙稿「1969-71年度における南山大学学外オリエンテーション―経済学部1982年度学外オリへの連続性―」『南山経済研究』第三六巻一号を参照されたい。

一九六六年度上智大学オリエンテーション・キャンプ報告書

先記の拙稿では、南山大学の一九六九年度から七一年度の全学的オリが、上智大学のオリエンテーション・キャンプ（以下、オリキャンと略す）を強く意識するものであったことを明らかにした。上智大学のオリキャンは一九六六年度に始まるが、どういう経緯かそこに参加した南山大生がぜひとも本大学でもと望んだのが、南山での学外オリ立ち上げのきっかけであった（一九七〇年七月七日評議会記録）。また、当時の評議会記録には、上智大におけるオリキャンの意義や運営方法をもとに、本学における効果などを考える会議録が残っており、その会議資料とみられる、上智大の学外オリの初実施の様子をまとめた『昭和41年度新入生オリエンテーションキャンプ報告書』（以下、上智大『報告書』）も、南山アーカイブズの学外オリエンテーションファイルに他の学外オリ関連資料と共に一括保存されている。

本稿では、拙稿では触れなかった、この上智大『報告書』についてももう少し紹介したい。A4版、全二四ページにわたる本報告書の構成は以下の通りである。

「新入生オリエンテーションキャンプの実施にあたって」、「実施要領」、「41年度新入生歓迎オリエンテーション日程表」、「プログラム」、「昭和41年度新入生オリエンテーション合宿・運営・管理報告とその反省」、「オリエンテーション合宿の目的とその反省」、「実施経過とその反省」、「宿泊管理とその反省」、「運輸管理とその反省」、「日程とその反省（現地本部）（クラス）（在京本部）」、「準備したもの」、「合宿に対する感想（全新入生）」

「第一回新入生キャンプをみて」

執筆には、学生部五名のほか、補助にあたった各学部の学生四名が加わっており、準備段階から含めて詳細な経

緯と反省点が多角的につづられている。大学の規模や歴史は違えども、これから学外オリを実施しようとする南山大において、この『報告書』は、非常に参考にできる内容のものであった。

上智大オリキャンの前身（一）

それではなぜ、上智大はオリキャンを始めたのであろうか。

上智大『報告書』によると、オリキャンの原型となるものは戦前に見られ始めている。すなわち、同大では、戦前において入学時に新入生、教職員、在校生等全大学構成員によつて「合宿」がおこなわれ、上智の「独特な雰囲気」をつくり出していた、と『報告書』は紹介する。戦前の同大におけるこの「独特な雰囲気」については、上智大学史資料集編纂委員会編『上智大学史資料集』補遺（一九〇三〜一九六九）所収、大学総長が文部省へ一九三八年六月十一日付けで提出した、同一九三七年九月から翌年二月までの「国民精神総動員実施ニ関スル報告書」に、垣間見える。日中戦争が勃発し、教育機関も含めて国民精神作興が求められる折、本報告書にも戦況報告会や防火演習などの実施状況が列記されているが、その最後は以下のような興味深い内容で締めくくられている。つまり、同大では、毎週もしくは隔週で一学級ずつ組主任の統率のもと、学長幹事、予科長、学生監、教授講師、配属将校が学生食堂の一部で学生と昼食をとり、「師弟共ニ肝胆ヲ吐露シテ談笑裡ニ公私生活ニ於ケル刷新自肅ノ方法ヲ講」じていたというのである。大学幹部と学生が交流するこの昼食会を、本報告書は「学生の訓育上最モ有効ナリ」と評価する。

太平洋戦争勃発直後の一九四一年四月には、上智大学修練報国団が発足した。同『上智大学史資料集』補遺所収、

一九四一年二月起案の団則によると、報国団は大学総長を団長、学生生徒と教職員を団員とするものであった。団の目的は「全学教職員学生生徒ヲ以テ一元一体タル組織ニ依リ教学ノ本義ニ基キテ修練ヲ積ミ教育ノ全般的効果ヲ發揮スル」ことで、団内には集団修練部、鍛錬部、国防訓練部といった戦時ならではの部のほか、生活部や、学術、芸能、興亜、語学習練、団報編輯といった諸事を統括する文化教養部も設けられた。また、集団修練部は、総務部の企画に基づいて、「学生道の振作向上」「勤労作業」「合同鍛錬」、そして「合宿訓練」「剛健旅行」を計画実行する部であった。一九六六年の上智大『報告書』にある、戦前に実施された教員と学生参加の合宿・旅行は、これに該当するものと思われる。名目はともかく、もしかしたらこの時点でも一九三七年「国民精神総動員実施ニ関スル報告書」にあるような和やかな「独特な雰囲気」が残っていたかもしれない。とすれば、教職員と学生の垣根を越え、同じ大学に所属する者として互いを認識する昼食会や合宿、旅行は、戦後の学外オリの前身と言えるだろう。

上智大オリキャンの前身（二）

上智大オリキャンのもう一つの前身と考えられるのは、一九五九年から一九六四年まで実施された「リーダーズキャンプ」である。『上智大学史資料集』第Ⅳ集によると、これは学生会に所属する各課外活動グループの指導的立場にある者が教職員と数日間共同生活を送る活動で、学生部長が提案した企画であったが大学が主導するものではなく、学生の自主的活動を大学が支援する形をとっていた。その目的は、大学、教職員、学生の信頼構築、課外活動の意義の探求、愛校心向上といった、戦前の昼食会等に共通するものであったが、学生の間で日米安保条約改正反対運動が起きる一九六〇年前後に実施された「リーダーズ キャンプ」の目的として「真の学生像の把握」が

挙げられているのは、注目される。

おわりに

上智大の全学的オリキャンが現在まで継続しているのに対し、南山大の全学的オリは一九七一年に終わった。両大学が違う道を進むことになった理由はいくつか考えられる。ひとつは、開始にいたるまでの経緯である。上智大のオリキャンの創始は、戦時中からの教職員と学生の交流の土台の上に生まれた、内生的なものであったが、大学としての歴史の浅い南山大の場合、目的はどうあれ、上智大の影響を受け、その方法を倣う形で始まったものであった。また、当時の評議会内でも指摘されていたように、大学の規模や組織も異なる。上智大では職員である学生局長が中心となって動いている模様であるが、南山大では教員である学生部長を中心に教授会選出の委員が中心になって動いていたように見受けられる。南山大が学外オリを始めた頃は、学内の学生運動が過激化の一途をたどる時期でもあり、その対処のための臨時教授会も定例を上回るほどに開催され混乱していた。対話を重視する学生部が学生会と折衝し学外オリの場で学生会が自ら主張する時間を設けたのにも、二回目以降の実施方法を検討する際に教員の一部から疑問視する声があがっていた。こうした様々な要素が絡み、南山大学の学外オリは停止にいたった。ただ、上智大でもやはり一九六〇年代末には学生運動が活発化している。上智大のオリキャンは、これをどのようになり越えて継続させていったのだろうか。

南山大の学外オリの開始と停止の経緯と背景を調査する中で、はからずも他校史の資料をもみることとなった。大学アーカイブズの活用法として、そのアーカイブズを所有する教育機関の自校史教育への利用があるが、他校史

から自校史を知ることまでできる。上智大と南山大は現在も上南戦などで強い繋がりをもっている。アーカイブズにおいて、両大学が連携することで相互の自校史研究の深化が期待できるのではないだろうか。